
漂流者は守護者で保護者～ヤテンノオヤコ～

金貨の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流者は守護者で保護者ゝヤテンノオヤコゝ

【Nコード】

N8489Y

【作者名】

金貨の騎士

【あらすじ】

なのはやフェイト達、そして自分の同類であるフィアと共にジュエルシード事件を解決した八神みらい。しかし、そんな彼らを今度は『闇の書』が騒動に巻き込む…。

『漂流者はハイブリッドな現役将校（無印編）』の続き（A's編）です。

とある世界の物語（前書き）

どうもこんにちは、金貨の騎士です。改めてよろしくお願いします。
感想は指摘でも不満でもいいんで遠慮なくどうぞ。

とある世界の物語

昔々、あるところに一人の男の子がいました。彼は魔法が大好きでいつも魔法の練習をしていました。男の子はたくさん練習をしたのでとても魔法がうまくなり、天才とまで言われました。

ところが、それを羨ましがった友達は彼を嫌い、大人たちは彼を化け物と呼び、家族には怖がられて捨てられてしまいました。男の子は一人ぼっちになってしまいました。

一人で魔法の練習をして、一人で遊び、一人で食事をし、一人で眠り、いつのまにか男の子は世界で一番不幸な者になってしまいました。

そんなある日、男の子は一冊の本を拾いました。その本は、拾った人の願いを叶えてくれる魔法の本でした。そして彼は願いました。

『寂しいのはもう嫌だ！！誰か僕と一緒に居て！！』

男の子の願いは叶いました。魔法の本に宿る女神様は、四人の家来を彼の家族として呼び出しました。男の子はとても喜びました。

それからというもの、新しい家族に囲まれた男の子は毎日が幸せでした。一緒に魔法の練習をして、一緒に遊び、一緒に食事をし、一緒に眠り、毎日が光輝いていました。

彼女達と暮らすうちに新しい友達がたくさんでき、好きな女の子もできました。気づいたら彼の周りにはたくさんの人達がいました。

でも男の子は女神様と家族のみんなが一番好きでした。

ところが、そんな日々も突如終わりを告げました。魔法の本の女神様と四人の家来は旅に出なくてはいけなくなりました。その旅に男の子は連れていきません。男の子は悲しくて泣き続けました。

『一人にしないで!!』

女神様は男の子を優しく諭します。

『あなたはもう一人じゃありません、あなたの周りにはたくさんの人たちが居るのだから…。だから、もう泣かないで。私たちに笑顔を見せてください…。幸せになってください…。』

願いを叶え続けてくれた女神様の初めてのお願いに、ついに男の子は泣くのを止め、笑顔で女神様達を見送りました。

それから時が経ち、世界で一番一人ぼっちだった男の子は、世界で一番多くの友達を持ち、世界で一番温かい家庭を手に入れました。

それでも彼は、女神様と家族達のことを忘れないために…“みんなに忘れられないように”、“彼女達と過ごした日々のことを本にしました”。

いつの日か、誰かが女神様たちに会った時に、こう伝えてほしくて…。

『ありがとう…僕は世界一の幸せ者になれたよ……。』

くアルテミア王国童話集・男の子と本の女神く

プロローグ（前書き）

さゝ頑張ろう

プロローグ

はやてside

〈海鳴市・ジュエルシード事件の2年前〉

時刻は午後8時。車椅子の少女が暗い夜道を一人で進んでいた。

彼女の名前は『八神はやて』。幼いときに両親を亡くし、その後は一人で暮らしている。今日は気晴らしに隣町まで電車で出かけたのだが、帰りの電車が途中で止まってしまったのだ。整備不良なのか人身事故なのかは定かでは無いが、そのせいで自宅付近に着いた時には、辺りはすっかり暗くなっていた。

「はあ…特におもしろいこともなかったし、今日は散々や…」

つついっ溜息と共に愚痴が零れてしまう。別に隣町に何も無いわけではなかった。この辺では見かけない店や、公園だってあった。でも…。

「…一人で行ってもつまらへん……。…」

学校に行っていないので友達はロクにおらず、通院先の石田先生とは仲はいいが忙しいだろうし、遺産を管理してくれてるおじさんも同様である。

「……言っても仕方あらへんか…、気づいたら家が目の前やし…。」

一人モンモンと考えながら帰り続けてたら自宅が見えてきた。一人暮らしの自分にとっては広すぎて寂しく感じる自分の家が…。

ところが、玄関前に辿り着いたら心臓が止まりかけた。

…黒装束の男が一人、玄関に立っていた。

「だ、誰…？」

当然ながら何者かを問うはやて。しかし男の口から出た言葉は、はやての『困惑』を『恐怖』へと変えた。

「『闇の書』に選ばれし者よ…我らの計画のためにも、お前には死んでもらう…！…！」

「…え。」

言うや否や、男は長い棒のような物を取り出し、はやてに向ける。そして、その先端に光が灯り始めた…自分の命を奪う死神の光が…。

だが、はやてはそれを見て恐怖しつつも、浮かべた表情は『苦笑』だった…。

（神様…私って、何か嫌われることでもしたん……？）

- - - 私は一人ぼっち…。

- - - 友達もいない…。

- - - 家族もいない…。

- - - さらに命まで奪うと言っんか…。

（…………あの世で会ったら絶対文句言ったる…。）

そんなはやての心情も知らず、男ははやてを不気味な物を見るような目で睨む。

「殺されそうな目に遭ってるにも関わらず笑うとは…やはり、貴様は死ぬべきだ。消えろ!!」

(こんな…こんなあんまりや…!!)

その言葉にはやては、自分の死を覚悟して目を瞑る。だが、何故か男が驚愕の声を上げる。

「ッ!? 何だ!？」

男が急に焦りだしたことを不思議に思い、はやては目を開ける。すると、男が驚愕の表情ではやてを見ていた…否、はやての“背後”を見ていた。つられるように背後を見ると…

「…ここはどこだ？」

グレーの髪に緑色の目、羽根突き帽子を被り、全体的に茶色い貴公

子のようなスーツを着た男が立つおり、周囲をキョロキョロと見回していた。さらに、彼の背後には光輝く魔方陣のような物が漂っている。

黒装束の男がはやてに向けていた棒を、その男に向けて問う。

「何者だ貴様！！次元漂流者か！？」

「ん？次元漂流者？…知らぬ。逆に訊くが、『アルテミア王国』を知っているか？」

「どこの世界だそれは！？」

「そうか、知らないか…。お前はどんなんだ？」

そう言つてはやてに尋ねる。さつきからありえない状況が続いているにも関わらず、不思議と落ち着いてきた。なので男の質問に答える。

「…知らへん…いや、知りません…」。

「ふむ、わかったありがとう…。ところで、この状況はアレか？俺はどうすればいいんだ？」

そつ言つて黒装束に視線をやる。すると黒装束は口を開いた。

「貴様は俺の邪魔をせず、黙って消え失せればいい。」

「…なんの“邪魔を”だ？」

「無論、この小娘を殺すところをだ…。」

その言葉を聞いた途端、彼は眉を顰めた。そして、はやてに声を掛ける。

「…おい、お前は殺される心当たりはあるのか？」

「さっぱりわからへん…。なあ、あんたもせめて理由を教えてくださいへんか？」

「どうなんだ、黒いの？」

「貴様らに教える義理は無い。」

二人の問いかけに即答した黒装束の男。それに対し、彼は額に青筋を浮かべた。

「そうか…ならば、俺はお前の邪魔をしよう。」

「…え？」

「何だと…？」

その言葉に困惑する二人。そんな二人を余所に、彼は指と首をペキペキ鳴らし始める。

「当然であろう。俺からしたらお前は、か弱い少女を襲う不審者か変態にしか見えん。」

「漂流者風情が、とっとと消えうせればよいものを…後悔するかい…！」

黒装束の杖…デバイスの先端から光の矢が放たれた。しかし、彼はそれを…

「ふんっ。」

――魔力を纏わせた片腕で弾いた。

「何！？――（ガシッ！！）ぬッ！？」

「貴様の事情は知らん。だが俺に敵意を持たせ、俺に殺意を向けた……その時点で貴様は俺の敵だ。ならば……」

彼は驚愕する黒装束に掴み掛かり、そのまま……

「目の前の敵は全て我が屠る！！せえい！！」

――ブォン！！

「うわあああああああああああああ！？」

空に向かって投げ飛ばした。だが、彼は止まらない。続けて出現させた魔法陣に手を突っ込み、そこから銃剣を取り出した。そして……

「それが我『ラインベルト』なり！！【天河瀑布】！！」

- - -ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

青白い光の柱が夜空へと伸びていった。はやてはその光景を呆然と眺めていた。やがて、自分を助けてくれた彼は舌打ちをしながらこつちを向いた。

「逃げられたか…。おい、怪我は無いか？」

「…あ、大丈夫です。ありがとうございます。…あのぉ、おじさんの名前は？」

- - -グサリッ！！

そんな音が聴こえた気がした。何故か、名前を尋ねられた彼はorz状態になっている。

「えっと…、どうかしたん？」

「…名前は『ミランダル・ラインベルト』……まだ、24歳だ…。」

「ええ！？全然ッ見えへんッ！！30ぐらいあるかと思たわ…。」

「気にしてるんだからそれ以上言っな…。お前の名は…？」

「自分、『八神はやて』言います。改めて、ほんまにありがとうございます。」

とりあえず危険が無くなり、一安心する二人。不意にはやてが口を開く。

「ところでミランダルさん、さっき次元漂流者って言われてたやん？それってなんや？」

「俺も分からんが…多分、異世界から跳んできた遭難者のことじゃないのか？」

「ミランダルさんって迷子なん？」

「…別の言い方は無いのか？だいたい、さっき通ってきた魔法陣をくぐれば帰れ……。」

…彼が出現した時に背後で浮いていた魔法陣は、とつくに消滅していた。

「…迷子確定やね。」

「…そうだな。」

ミランダルが凹んだその時、はやては何かを思いついたかのような表情を見せ、ミランダルに話しかける。

「ミランダルさん、しばらく私の家に来いへんか？」

「…いいのか？」

「ええよ。……どうせ、私しかおらんし……。」

その言葉にミランダルははやてのことを色々察した。なので、あえて厚意に甘えることにした。

「それじゃあ、少しの間世話になる。よろしくな、はやて。」

「こちらこそよろしく、ミランダルさん。」

・・・こうして『銀河の守護霊』と呼ばれた男は、そう遠くない未来に『夜天の主』と呼ばれる少女と出会い、騒がしいくらい賑やかな日々を送り始めるのであった。

第一話 非日常な日常（前書き）

ヴォルケンズの登場までもうしばらくお待ちください…。

第一話 非日常な日常

みらい side

く 現在（冬）・海鳴市、八神家付近く

『ミランダ・ラインベルト』改め『八神みらい』は、道を歩きながらはやてと出会った時を思い出していた。あの時はちよつと居候したら去るつもりだったのだが、気づいたらもう3年近くも一緒に暮らしており、お互いに家族として認め合っていた。

「みらいさん、どうしたんですか？」

「ん？ちよつと昔のことを思い出してな…。」

「ふん。それにしても、楽しみだな。はやてちゃんの家に行くの。」

彼の隣には、栗色の毛をしたはやてと同じ年齢の少女、『高町なのは』がいた。ジュエルシード事件に決着がついたあとも当事者達は交流が続いていた。基本的に暇な八神家やフィアがちよくちよく『翠屋』に遊びに行っていたのだが、今日はなのはが八神家に行くことにしたのである。はやては家でなのはと彼女を迎えに行つたみ

らいを待っている。

そして、ついに八神家に着いた。

「おじゃまします。」

「いらつしゃい。」

玄関に上がると、前と後ろ（リビングのはやて背後のみらい）から返事が返ってきた。なのはは、そのままはやてが居るであろうリビングへと向かった。みらいも続いて靴を脱いで、それを揃えるために視線を下に向けた。その時…。

「ひゃあああああああああああああああ！？」

――ズドンッ！

「にゃあああああああああああああああああああ
あああ！！！！？」

はやてとなのはの悲鳴、さらに何かが突き刺さる音が八神家に響いた。何事かと思い顔を上げると、目に入ってきたのは扉の前で腰を抜かしたなのはと…。

――リビングへの扉をぶち破り、顔を突き出すカジキマグロだった…。

はやてside

みらいに拳骨を落とされたはやては今、頭を抑えてゴロゴロしていた。

「痛い――そんなに怒らんでもええやんか。」

「馬鹿野郎！！『家でカジキに刺される』なんてシニール過ぎて笑えんわ！！」

「み、みらいさん…別に怒ってないからもついいですよ……？」

二人のことを待つてる間、暇になったはやては最近すっかりハマッタ釣りをしながら待つことにしたのだ。みらい特製の『どこでもフイッシング魔法陣（はやて命名）』を発動させ、魔法で強化した釣り道具を使い、暇つぶしを始めたはやて。

しばらくして、なのは達が家に来たと同時に竿に魚がヒットした。
みらいとなのはが来たことだし、さっさと釣り上げて終わらせよう
と思い、釣竿をおもいきり振り上げた。

みらいがその釣竿を『鯨が釣れるほど強化してあることを』忘れて
…。

「それで…？あれほど勢いよく釣竿を振り上げるなど言ったのにソ
レをやらかし、異常なくらい勢いをつけてカジキを釣り上げ、その
まま扉にズドンか？」

そう言って扉から顔だけ突き出し、ダランとしているカジキに目を
やる。

「…うん。」

「全く…。次同じことやったらデコピン（恐怖の制裁）だからな？」

「ひいっ！？それだけは勘弁やー！ー！！！」

（拳骨より怖いのか？）

はやての異常なビビリ具合に不思議に思うのは。しかし、彼女は知らない。みらいのデコピン（恐怖の制裁）は魔力を纏わせた手でやってくることを…。

「あれはマジで首が飛ぶかと思たわ…。」

「一体どんなデコピンなの！？ていうか、はやてちゃんその時何したの？」

「エイプリルフルでみらいさんの私物を全部質屋に入れたって嘘ついた。」

「…自業自得なの。」

次元漂流者のみらいがエイプリルフルを知ってるわけ無いのに…。不意になのはの視界にあるものが目に入った。

「あれ？その本はなんなの？」

そう言ってリビングの窓際に佇む本を指差す。その本は全体的に黒く、独特な装飾がされていたが、一番気になったのはその本が鎖で縛られていたことである。

「あ、またこんな所に来て…。」

「やれやれ、この前なんてトイレにいたぞ？」

「…ん？」

二人の反応になのは違和感を感じた。この本が二人の物なのは分るのだが…。

「ねえ、はやてちゃん…二人の言い方がすごい気になるんだけど…。」

「ん？なんか変やった？」

「うん、なんか『この本がまた勝手に動いた』みたいに聴こえたの…。」

「それであつてんよ？」

「……………ふえ？」

「今、なんと仰った？」

「だからこの本、家の中なら神出鬼没なんよ…。戻しても戻してもどっかに行くんや…。」

「ふえ ええええええ！？オバケええええええええええええ！」

「……自分だって魔法少女で魔王だろうが……」

取り乱すなのはボソリと突っ込むみらい。だが、とりあえず説明してやることにした。

「これは俺の持ち物でな、俺の一族に代々伝わる家宝……らしい。」

「らしいって。」

「ずっとこの鎖が外れなくてこれがなんの本なのかすら判つて無いんだよ……。ところがだ、はやての家に居候し始めた時にな、はやての部屋にもこれにそっくりな本が置いてあつたんだよ。」

「それで？」

「折角だから二冊とも本棚に並べて置いたんだが…そこから例の怪奇現象が始まった。」

それを聞いただけでなのは顔を青くした。ある時はリビング、ある時は玄関にキッチン、さらにはトイレにまで出現する謎の本に最初こそビビッたものの、それ以上のことは無かった。

「ぶつちやけ詳しいことは私らにも分からなかったけど、呪ってくる訳でもないから無害やし、ほっとしてるんや。なにより流石にもう慣れたわ…。」

「そ、そうなの…。」

とりあえず謎の本のことはこれで終わりになった。

「この話はもういいだろう。なのは、フェイトからのビデオレターは？」

「あ、ちゃんと持ってきてますよ。」

「ほんまか！？フェイトちゃん私のメッセージ見てくれたかな？」

何度か『翠屋』に行った時に、一緒にビデオレターを見せてもらい、なのはが返事を送るついではやても自分のメッセージも便乗させてもらったのである。

「私もまだ見てないんだよね。……そういえば、フィアさん来れなくて残念だったね…。」

「いや、あいつはむしろ結果オーライだろ。運がよければフェイト達に直接会えるだろうし。」

この場にいないもう一人を思い出す二人。彼は今、とある用事で海鳴市どころか地球にすらない。

「フィア兄、今頃どうしてるんやろか……ボソッ」また一緒にみらいさんからかって遊びたい…。」

「今頃、武装隊の半分くらいは花畑と川を見る羽目になってんじゃないか？」

そう言ってみらいは、ジュエルシード事件を経て戦友となった彼のことを思い浮かべるのだった。

クロノ side

〈とある管理外・世界〉

そこは碌に生物がおらず、瓦礫の山が広がり続ける世界だった。かつては高度な文明を持っていたようだが何かの原因で滅亡し、世界全体がただの廃墟と化したのである。

そんな世界でクロノは瓦礫に身を潜め、今の自分の状況を呪った。

「……なんでこんなことに…。」

今思えば、心の中で『所詮質量兵器』などと思っていたのかも知れない…。今はそれが恐ろしい勘違いだと自覚していたが…。気づけば味方はほぼ全滅、残ってるのは自分だけだった。

「とにかく、ここから離れないと…。」

《目標を発見しました。クロノさんです。》

「流石と言うべきか……。やっぱり最後まで残ったのはお前か……。」

「ッ!？」

突如上空から声が響いた。クロノが慌てて上を見上げると、そこには黒い軍服を身に纏い、背中に黒い4枚の翼、赤みを帯びた茶髪に青い瞳、さらに肩には金色に近い毛並みの猫を乗せた男が居た。

やがて男は口を開く。

「訓練時間終了。クロノ、お前はクリアだ。」

みらいと同じく次元漂流者であり、臨時教導官の『フィア・レイガード』はそう言った。

第一話 非日常な日常（後書き）

次回の更新は月曜日くらいになりそうです。

第二話 鉄と火の脅威（前書き）

あれ？サイトの画面がおかしい…俺だけ？今だけ？

第二話 鉄と火の脅威

クロノ side

↳ 数時間前、アースラ・執務官室↳

「生存訓練…？」

「おう。ぶつちやけ、お前らの質量兵器に対する認識が甘すぎる…。」

┐

クロノの執務室に来て開口一番にフィーアはそう言った。現在彼は、リンディとの取引の結果『臨時教導官』をやらされている。素性や能力の関係上ミッドチルダや管理世界には立ち入るのは不可能だが、管理外世界や無人世界なら可能とついで引き受けることになった。

管理局には素性（連邦）を明かしたくないので、『現地協力者』で通している。フィーアと彼の祖国『ベルフィーア連邦』のことは、ジュエルシード事件に関わったなのは達とアースラのメンバーしか知らない。

「ところで、その肩の猫は？」

「ん？…ああ、こいつは『アリス』だ。この前拾った。」

今、フィーアは肩に猫を乗っけている。その猫は尻尾が二つあり、金色のような毛並みを持っていた。

「それよりも…今後の訓練の参考までにアンケート的なモノをやったんだが…。見てみる。」

苦い顔をしながら、そのアンケート用紙をクロノに見せる。対象はアースラの武装隊である。

「……………。これは…本当なの…か？」

「…一応、書いた本人達に訊いてみたが…マジだ。」

その結果を見たクロノは啞然とした。アンケートに書いてある内容は以下の通りである。

…日頃の訓練内容について。

- - - 今まで経験した戦闘状況について。

- - - 各自の得意分野。

この3つの内容だけの結果ならば、全体的に別段おかしいことは何も無かった。しかし、二つ目の内容の結果にフィードバックはある違和感を感じ、内容をひとつ追加して改めてアンケートを取ったのだが…。

「『今まで遭遇した質量兵器。』を訊いてみたんだが…。改めて問うが、お前ら管理局の目標のひとつは『質量兵器の根絶』だよな？」

「…その通りだ。」

「なのに武装隊の半分近くが『銃と刃物しか“知らない”』ってのはどういうことだ！？“遭遇してない”じゃなくて“知らない”ってのは！？」

そうなのだ…彼らの半数近くが“魔法関係の戦闘”しか経験しておらず、“質量兵器との戦闘”を経験した者がいないに等しかったのだ…。管理局全体が魔法主義なのは解ってるが、先日のように地球のような世界にだって行く時があるのだ。質量兵器と戦闘する可能性が無いわけ無い。

「つーわけで、リンディ提督にも許可貰ったからちよいと痛い目に遭ってもらう。なに、安心しろ。死なない程度でやってやる。」

「…分かった。彼らにもいい機会だ。是非やってくれ。」

「アホ。『リンディ提督に許可貰った』って言っただろ？今更、お前の許可を取りに来たわけねえだろ。お前も参加するんだよ。」

「…え？」

フイア side

「2時間前・とある無人世界」

「諸君、俺が臨時教導官のフイア・レイガードだ。よろしく頼む。なるべく返事は『了解』で返せ。」

「……了解!!」「」「」

訓練場所選ばれた無人世界で、武装隊メンバーの返事が響く。肩に猫アリスを乗つけたフイアの隣には、クロノが顔を青くしながら立つ

ていた。

（…フィアは“アレ”を向けてくるんだらうか？確か魔法弾も鉛弾も撃てると言ってたが……。）

“アレ”とは、フィアが『時の庭園』で使用した【炎翼砲門】のことである。合計十五門のガトリング砲による一斉射を目の前で見たクロノは、自分があの時の傀儡兵のようにバラバラにされるところを想像してしまった。

……だが、待っていた現実はそれどころでは無かった…。

「と、言うわけで…これから諸君らには質量兵器との戦闘訓練を行うってもらう。質問は？」

いつのまにか大雑把な説明が終わったようである。若い局員が手を挙げ、フィアに質問する。

「意味あるんですか？それ…。」

…質問どころか、真っ向から否定してきた。その局員に対し、フィ

ーアとクロノは溜息をつく。渋々ながらフィーアが口を開く。

「お前、名前は？」

「『ジム・ヘリオン』一等空士です。」

「そうか、ヘリオン空士か…。そこまで言うなら、お前には“特別な内容”を追加してやる。」

「…？」

意味が解らず、ヘリオン空士は首をかしげる。それを無視するようにフィーアは話を進めた。

「ま、『百聞は一見にしかず』。経験すれば嫌でも解るだろうさ…。ルールは至って簡単！！今から二時間、俺の攻撃から生き延びろ！！生き延びるためなら何をしても構わん！！魔法を使うもよし！！俺を攻撃するもよし！！とにかく生き残れ！！以上！！」

《訓練開始まで、残り1分前。》

リリアによるその言葉と同時に、アースラ武装隊のほとんどがフィ

ーアから逃げた。一部の武等派だけがフィーアの目の前に立ったままだが、どうやら開始と同時にフィーアを攻撃するつもりのようなのだ。

《残り30秒。》

「ほう、ヤル気満々か…。」

フィーアを睨む局員達。どうやら彼らはフィーアのことを気に食わないらしい。

「何をしてもいいんだろう?。」

「次元漂流者なんかに教えて貰うほど、俺らはひ弱じゃねえんだよ。」

その言葉にフィーアが困ったような表情を見せた。

《残り10秒。》

「…参ったな、これじゃあ訓練にならない……。」「

フィーアがそう呟き、局員達がデバイスを彼に向けたのとほぼ同時に……。

《0。訓練開始！！》

「君達は追加訓練決定だ。」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

轟音と共に、彼らの足元に設置してあった『地雷』が爆発した。

クロノ
side

「な、なんだ……？」

開始と同時に響いた轟音に、思わず全員が視線を向けた。そして、オペレーターを任された『エイミィ』から通信が入る。

『訓練開始。同時に『ザク陸士』、『リーオー三尉』脱落。追加訓練決定だよー!』

「ちょっと待てエイミィ…追加訓練ってのは何だ？僕は聞いてないんだが……。」

『開始と同時に失格になっちゃった人達は訓練にならないから、後で改めてやり直したって。クロノ君や他のみんなも、あっさり失格になったら同様だってフィーア君が…。』

「なん…だと……。」

呆然とするクロノ。彼は直前にしたフィーアとの会話を思い出していた。

「…ちなみに、厳しすぎて訓練にならなかったらどうするんだ？

「…俺が“一人ずつ”、“丁寧に攻撃しながら”指導してやる。」

（冗談じゃない！！それは死ぬっ！！）

『善は急げ』とばかりにクロノはそこから急速に離れた。彼に連れて数人の局員達もその場から離れた。それとほぼ同時に…。

……ドゴオオオオオオオン！！

再び響く爆音。振り向くと、さっきまで彼らが居た場所が派手に吹き飛ばされていた。そんな中、局員の一人が空に指先を向けて声を上げる。

「おい！！あれは何だ！？」

その先には、煙を引きながらこちらに向かってくる複数の何かだった。クロノと一部の局員はそれが何か気づく。

「ッ！？馬鹿、あれは迫撃砲だ！！撃ち落せ！！」

「ええ！？あれも質量兵器！？」

その言葉と同時に放たれる複数の魔法弾。迫撃砲の弾は空中で迎撃され、ほとんどが爆散した。撃ちもらしたモノは見当違いの方へと

落ちていったようで、爆発音が響いた。

攻撃を防ぎきり、彼らは安堵する。

「…焦っちまったが、狙いが雑だったな。」

「まだこっちの場所が判って無いんじゃないのか？」

「……“判って無かった”の間違いじゃ…。」

「「「え？」」」

――3人目の言ったことは正しかった。嫌な予感がし、再び上を見上げると目に飛び込んで来たのは、彼らの位置を割り出したフィアアの集中砲撃による砲弾で真っ黒な空だった。

ヘリオン side

完全にこの訓練を舐めきっていたヘリオンは今、一人で瓦礫の廃墟

を走っていた。

（いったい何なんだ！？）

訓練開始からわずか30分たらずで、武装隊の3分の1が脱落となつてしまった。その現状が信じられず、ヘリオンは半ばヤケクソになつてきた。

「畜生！！質量兵器つて魔法より劣るんじゃないのかよ！！」

ヘリオンにそう吹き込んだ彼の先輩は、開始早々に脱落している。

「魔法に引けを取らないどころか加減知らずの分、性質悪いじゃないか！！」

「よく解つてんじゃないか。だが、それと戦うのがお前ら『時空管理局』じゃ無いのかよ。」

「ッ！？」

声がしたほうを見ると、涼しげな表情を見せるフィアが立っていた。その姿に、ヘリオンは嫌な汗を流す。直接は見ていないが、フ

イーアが質量兵器を用いて自分達を攻撃しているのは理解している。
故に、どのように攻撃してくるのか判らずヘリオンは恐怖する。

「まったく…機会が無かったとは言え、自分達が敵と認識してるものくらいちゃんと理解しておけ。」

《フィア。彼もアンケートに『銃と刃物しか知らない』と書いた一人です。》

「…マジか。」

そうなのだ、ヘリオンも質量兵器をほとんど理解してない者達の人だったのである。ここまで生き残れたのは途中までクロノについできたからである。もっとも、途中で見失ってしまったが…。

「おい、ヘリオン空士。」

「…はい、なんでしょう?」

「俺の言った事は覚えてるか?」

「…自分だけ“特別な内容”を追加？」

そう言った途端、フィーアがニヤリとした。そして…

…ドガッシャアアアン！！

轟音と共に、何かが瓦礫を蹴散らしながらフィーアの背後に現れた。それは四角形が二段重なり、二段目には筒状のモノが正面に突き出しており、左右にキヤタピラを装備していた。早い話…。

…戦車である。

「第97管理外世界地球、日本の軍隊（自衛隊）の主力戦車、『90式』だ。」

「…、これも質量兵器！？」

90式の巨体に圧倒され、ヘリオンは後づさる。彼にとって戦車は、怪獣のようにも見えたらしい。若干涙目のヘリオンにフィーアは容赦無く宣告する。

「撃て。」

《発射！！》

――フィアとリリアの声、そして戦車の咆哮を最後にヘリオンは意識を手放した。

フィア side

〈訓練終了後（現在）〉

フィアはその後も【黒羽】を用いて質量兵器を大量生産しながら
局員達を恐怖のどん底に叩き落した。あるものは地雷に爆破され、
あるものは迫撃砲で蹴散らされ、あるものは戦車砲で蹴散らされた。
武装ヘリも使ってやろうかと思っただが、その頃にはクロノしか残っ
てなかったから結局止めた。

「んで、終わってみて感想は？クロノ。」

「…生きてるって素晴らしい。」

後半、クロノはとにかく回避することと逃避することに集中したようである。しかし、残り30分前にして生き残ったのが自分だけになり、フィアの攻撃が全て自分に集中した時は…

「瓦礫の世界で“綺麗な花畑と川”が見えたよ…。」

「…すまん、やりすぎた……。」

念のために断っておくが、フィアの魔道科学を用いて即席で造った非殺傷機能を使用したので、死者は一切出てないのであしからず。脱落者は全員アースラへ強制転移されている。今、アースラの医務室は全身打撲の武装隊メンバーで一杯だろう…。

「それにしても…君は戦車まで造れるのか……。」

「流石に執務官なら知ってたか、戦車。」

陸の質量兵器の王者、戦車。執務官ともなると、遭遇しなくてもその存在くらいは知っていたようである。

「今度の訓練内容に『戦車とタイマン』追加しとくか？」

「できれば遠慮したいが…頼む、やってくれ。魔法だろうが質量兵器だろうが、戦いの訓練に変わりはない。」

「了解。んじゃ、ちょっと休憩挿んだら訓練再開な。」

「了解した。」

その言葉と同時に、休息のためにアースラへと帰還するクロノ。転送ポートに入る直前、心なしか足をふらつかせながらガッツポーズを決めてた気がするが、見なかったことにした…。

「さてと…俺らも一回帰るか……。」

（ねえ、フイーア。）

誰も居ないはずのこの場所で頭に響く、自分のものでもリリアのものでもない声。しかし、彼は特に驚きもしないで返事をする。

「ん？どうかしたか？」

（なんでいつもは戦車とか造らないの？）

「無駄に高性能な動く砲台（戦車）を一台造るより、魔法で浮かせる大砲を三台作ったほうが安上がりなんだよ…。今回の訓練は、質量兵器を使う世界の常識に合わせてみただけだ。」

「魔法で空飛ぶ大砲なんて、自分の祖国ベルフィアくらいだろうし…。」

（ふん、そうなんだ…。）

「…なあ、いい加減フェイトたちに教えてもいいんじゃないか？」

（…まだ無理よ。心の準備というかなんというか…とにかく無理…。）

「…分かったよ。まだ秘密にしとくさ。でも、期待すんなよ？アリスも判つてると思うけど、俺の隠し事はすぐばれる…。」

（承知の上よ。それと、誰も居ないときは本名でいいわよ。）

「はいよ、『アリシア』。」

・ ・ ・ そう言って、フィアは自分の肩に乗った猫に… 『アリシア・
テストロツサ』に返事をした。

第三話 起動（前書き）

ついにあの四人が…

第三話 起動

みらい side

〔 12月24日・pm18:00・八神家 〕

「そうか…、こっちは当分帰れそうにないか…。」

『 ああ、ここぞとばかりにコキ使われてる…。年越しもアースラで過ごすかも…。 』

現在みらいは、はやてとなのは、それとなのはが呼んだアリサとすずか達と共にクリスマスパーティを楽しんでいる。女子達の会話が盛り上がってきたその合間に、ベランダで一人くつろぎながら彼はフィーアと思念通信で談笑していた。

『 そつえばリーゼ姉妹に会ったぞ? 』

「元気にしてたか? 最近、二人とも仕事が忙しくて中々来ないんだ…。」

『その内『またちよっかい出しに行つてやる』ってよ。愛されてんな（笑）』

「……『また、はやての世話を頼んでやる（揉まれてしまえ）』と伝えとけ。」

特に『ロッテ』の方には散々悪戯された記憶がある……。同時に、はやてのセクハラを『アリア』以上に受けてたが…。

『はっはっはっ、了解。伝えとくさ。んじゃ、はやてとなのはにもよろしく。』

「おう。」

そこで通信を終わらす二人。みらいは誰もいないベランダから、はやて達のいるリビングへと戻っていった。

「アースラ艦内・フィア専用室」

アースラの空き部屋を改造して完成したフィア専用室。そこに“彼ら”はいた。

「あゝあゝ…楽しそうで羨ましい限りだよ……。」

《こんな美女二人と一緒に過ごしたい何を言いますか。》

「……美女って……。」

《……聞かなかったことにしてください。自分で言っただけで恥ずかしくなりました……。》

お互いドンヨリとした空気を漂わせていた。異世界出身故に、クリスマスなんてイベントは知らなかったのだが、普通に楽しそうだったのでみらい達が羨ましかった。

そんな二人に声が掛けられる。

「まったく……。だからって、そんな雰囲気出さなくてもいいじゃない……。」

「とは言ってもなあ…。って！！勝手に人型になるな！！誰か来たらどうすんだ！！」

「大丈夫よ、近くに人の気配は無いわ。」

顔を上げるとそこには、綺麗な金髪を伸ばし、赤い瞳を持った少女がいた。服装は黒がベースのゴスロリ風のドレスを着ていた。その少女の姿は、フィーア達によく知る少女と瓜二つである。

「それにしても、改めてフェイトとそっくりだな…。いや、逆か…フェイトがアリシアにそっくりなのか…。」

「当然でしょ。フェイトは私の分身として生まれたけど、それ以前に大切な妹なんだから。」

「大切な兄弟が必ずしもそっくりになるとは限らねえぞ。」

「それは同じ“死に損ない”としての経験談？」

「…そう、彼女はフィーアの猫『アリス』こと『アリシア・テストタロツサ』である。」

例の事故で死んだ彼女は、プレシアのことが心配で『幽霊』と化してしまったのだ…。案の定、心配した通りにプレシアは廃人寸前になってしまい、尚更彼女のことを心配になって成仏できなくなり、ずっとプレシアを見守り続けていたのだ。

ところが、プレシアが『プロジェクト・F・A・T・E』に手を出し始めた時に変化は起きた。当初アリシアは、プレシアが“自分の代わりとなる娘”を産み出そうとしているのかと思っていた…。かつて生前に交わした約束を母が守ってくれたと……。だが、現実とは違った。プレシアが求めたのは“アリシア自身だった”。それだけでも衝撃的だったにも関わらず、その後も悲しみは続いた。

生まれ方はどうあれ、アリシアはフェイトを妹として見ていた。何故なら、あの約束がある限り、自分が死ななくても彼女は生まれたかもしれないからだ。だから自分にとっては大切な妹であった。にもかかわらず、その大切な妹は、大切な母親に傷つけられていったのだ…。

――全ては自分が死んだせい…。

いつしかそんな考えが頭を占め、彼女は深い悲しみに苛まれていった…。やがて、限界を突破した負の感情により、『悪霊化』するはずだったのだが…。彼女は深い眠りについただけであった。彼女曰く、“温かい何か”に包まれた感覚だったそうだが…。

「ところで…、その“猫耳”と“尻尾”は隠せないのか？」

「無理よ。この耳と尻尾、あと世話好きの部分は『リニス』の名残なのよ…。」

書き忘れたが、今の彼女には猫耳と二つの尻尾が付いたままである。そして、今でお解かりになったと思うが、アリシアの悪霊化を防いだのは同じくプレシアのことが心配で幽霊化したフェイトの教育係りであり、プレシアの使い魔の『リニス』である。彼女はアリシアの魂と自身の魂を融合させて彼女を助けたのだ。意識を完全にアリシアに譲ったため、今となってはアリシアを助けた理由も含めて、彼女の真意は判らず終いである。

その後、『ジュエルシード事件』による『時の庭園』での戦闘により、おかしい空間が出来た。まず、『時の庭園』自体が“次元の狭間”に存在し、“ジュエルシードの暴走した魔力”、“時の庭園の動力炉”、“虚数空間”、“試作型AMF”、“異世界の超魔法”、“白い魔王とその仲間達の魔法”…今思えば、『混ぜるな危険!!』要素のオンパレードであった…そんな空間に居たせいか、眠っていたアリシアの魂に異変が発生し、気づいたらただの『幽霊』ではなくなり、そして…。

「俺も“普通に”亡霊化したら妖怪になったのかな…？」

「知らないわよ。」

《て言うか何を持って“普通”とするんですか？》

- - - 彼女は幽霊から妖怪になっていた。『猫叉』になったのはリニスが“山猫”だったからなのではと推測されている…。

「そんなにいいもんじゃ無いわよ？常に自分がここに居るのか居ないのかハッキリした感覚なくてフワフワしてるし…。大体、母さんとフェイトに『私、妖怪になったの』なんていきなり言えないし…。」

「あの二人とアルフは平気だと思っただが…。最初はビックリするだろうけど…。」

いきなりこんな形で甦ってきても受け入れて貰えるか不安なので誰にも打ち明けておらず、アリシアの事は未だにフィーアとリリアしか知らない。

「いいの！…とにかく今はまだ黙っとくの！…。」

「はいはい…。とにかく、そろそろ飯食いに行かないか？」

「え…私が作ろうと思ったのに……。」

「今度でいいよ。ほら、乗っかれ。」

『にゃ。』

そして、猫化したアリシアを肩に乗っけながらフィーアは部屋を後にした。途中、遭遇したエイミイがアリシアを思いつ切り抱きしめて引っ掻かれたのは割愛する。

はやてside

～pm23:57・八神家～

「あゝ楽しかった。来年もなのはちゃん達、呼ぶべきやな…。」

自分の寝室で眠りにつこうとしながら、今日の楽しい時間を思い出していたはやて。なのは達は、アリサを迎え来たりムジンに便乗させてもらいながら帰っていった。

みらいはリビングの片付が中々終わらず、悪戦苦闘している。

「…ただ、楽しすぎたせいで全然眠くならへん……。」

もう日にちが変わるというのに全く眠気がこないのである。いくら休日続きと言っても、寝不足はお肌の天敵である。

「そうゆう時はみらいさんに添い寝してもらうに限るわ…。」

はやては眠れない時、よくみらいに添い寝してもらっていた。みらいも別段断る理由も無く、すんなりとお願いを聞いてくれる。添い寝＋子守唄、時々朗読による効果は抜群で、絶大な安心感と共に眠りにつけるのである。

「早く戻って来いへんかな…ありや、25日になってもうた……。」

ふと時計を見たら丁度一日が終わったところだった。だが、それ以上気にすることも無くゴロリと寝返りをつつた。ところが…。

『起動。』

「え…？」

声のした方を振り向くとそこには…よく瞬間移動するみらいの本ではなく、今までピクリとも動かなかった“自分の本が怪しく光ながら宙に浮いていた”。思わず思考がフリーズするはやて。しかし、そんな彼女に構わず自体は進行する。

――カツ！！

「おわっ！？」

突如光が強く輝き、はやての寝室が光で満たされた。やがて、光が収まるとそこには、四人の人影が存在していた。そしてそのうちの一人、ピンク色の髪をしたポニーテールの女性が口を開いた。

「『闇の書』の起動、確認しました。」

続けてやや短めの金髪の女性が言葉を紡ぐ。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます。」

そして、白い髪で獣の耳と尻尾を付けた筋肉質の男と、赤い髪を三

つ編みにした少女が言葉が続けた。

「夜天の主の元に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター。なんなりと御命令を…。」

そう閉めくり、主であるはやての返事を跪きながら待つ四人…『ヴォルケンリッター』。だが、いつまでたっても無反応であるはやてを怪訝に思い、赤髪を三つ編みにした少女が顔を上げる。

すると、はやては気絶とまでは行かなかったが、呆然としていた。日ごろ、みらいやファイア達と過ごしたせいで耐性はついていたが、流石にこんな予想外な場所とタイミングでこんな状況になったことには驚きを隠せなかったようである。

「…おい、あんた大丈夫か？」

「え？…ああ、うん。大丈夫や…。」

「ヴィータ、主の御前だぞ。無礼な真似は許さん。」

三つ編みの少女…『ヴィータ』に咎めるような口調で話しかけるポニテールの女性…『シグナム』。

「別に気にせんでもええよ？私もこの状況がよく判らんし…。詳しい話、聞かせてくれへん？」

「主の望みとあらば。」

物事が割と穏やかに進み、ホッとするはやて。何度か命を狙われたことのある彼女にとって、彼女らに敵意が無い時点で充分なのだ。

「では、改めましてこの『闇の書』なのですが…。」

――ガチャッ

「おい、はやて。また勝手に魔方陣弄くつたの…か…。」

流れる気まずい沈黙。片付けを終わらせた直後、何故かはやての部屋から魔法の反応を感じ、様子を見に来たみらいが寢室の扉を開けたのである。

「……………」

何を言えいいのか判らず、6人は沈黙を保つ。だが、その空気をシグナムが叩き壊した。

「『シャマル』、『ザフィーラ』主を守れ！！ヴィータ、やるぞ！！」

――物事を物騒でややこしい方向へと……。こうして、海鳴市二度目の騒動は幕を開けたのである。

第三話 起動（後書き）

近日、アリシアを含めた数人のプロフィールを書きます

プロフィールと補足（リリア追加）（前書き）

改めてオリキャラ二人の紹介と補足を…。

プロフィールと補足（リリア追加）

名前 八神みらい（本名ミランダ・ラインベルト）

年齢 26歳（年明けと共に27歳になる予定）

武器 銃剣オルギニス（ベルカ式）

出身 アルテミア王国

備考・管理局も知らない世界から突如地球に現れた次元漂流者。偶然はやてを助け、そのまま居候していたら、いつのまにか家族と認め合うほどの仲になっていた。ジュエルシード事件を経てフィーアやなのは達と交流を持ち、現在でも家族ぐるみで度々遊んでいる。ちなみに、元近衛隊の猛者ゆえ、実力は折り紙つき。大量の魔力光を引き連れて戦う姿から『銀河の守護霊』と呼ばれていた。

今回の『闇の書』による騒動は、彼の所持品と祖国の“とある物語”が関わってくる。

名前 ファーア・レイガード

年齢 20歳（来年の春頃に21歳になる）

武器 魔剣ヴィルガロム（現在、少々おかしいことに…）

出身 ベルファーア連邦

備考 みらいと同じく管理局が知らない世界から来た次元漂流者。アルテミア王国とベルファーア連邦は同盟世界なため、二人は互いの噂程度なら知っていた。今では戦友といった間柄になっている。ジュエルシード事件解決後、ほぼ成り行きで妖怪化したアリシアと行動を共にする。祖国では特務准将の座に就いており、自身の能力とどんな状況でも生き残ることから『黒鋼の不死鳥』の異名を持つ。もつとも、一度死んだことがある本人にとっては皮肉にしか聴こえていない。

彼らが度々使う『思念通信』や『非殺傷機能』などは、『思念通話』や『非殺傷設定』などと微妙に仕組みが違ふ。が、大体は一緒である。

名前 リリア（正式名称 先行試作型携帯式サポートAI・No1 2・リリアンヌ）

年齢 造られてから13年経過、ついでに人格は女性。

備考 兵士をサポートするべく造られた試作AIの一機でフィーアの相棒。見た目は腕時計となんら変わらない。魔道科学の結晶であり、高性能な通信システムや索敵システムを搭載、さらに魔法も科学も理解できる上に使用もできる。試作型とはいえAMFを強制解除したこともある。本来なら数年の試験運用の後に回収される予定だったが、フィーアとリリアが渋ったために未だ現役を続行中。

フィーアと共に戦場を歩み続け、進化と成長を続けている。現時点では並みの魔導師より驚異的である。

名前 アリシア・テストロッサ

年齢 幽霊時に意識不明状態の期間があったので不明（精神年齢は15歳前後）

出身 ミッドチルダ

備考 死後リニスと魂が融合し、様々な力が集った『時の庭園』を経て妖怪『猫又』化したプレシアの娘。魔力は無いに等しいが妖力を所持しており、使い魔と違って完全に独立した存在。とりあえずプレシアとフェイトを救い、自分の亡骸を家族の元へと連れ帰った

ファイアに恩を返すべく現れたが、いつのまにか二度目の生を謳歌することに夢中である。また、家族を含めた周囲の人間には、まだ自分の事を教えていない。

ある日、こっそりファイアの魔剣に触れたら、自身の妖力に反応してヴィルガロムがおかしな事になった。今は特に問題無いのでファイアは怒ってない。

プロフィールと補足（リリア追加）（後書き）

ツッコミどころ満載ですな…。

第四話 守護騎士と守護霊（前書き）

あ…プロフィールに2人の通り名とリリアのこと書き忘れた……。

第四話 守護騎士と守護霊

みらい side

＼八神家・am0:03＼

「待て待て待て待て待て待て！！落ち着け落ち着けえ！！」

「問答無用！！」

今、はやての部屋はいつになく混沌としていた…。突如現れた守護騎士『ヴォルケンリッター』に敵と認識され、いきなりそのリーダー格に斬りかかれたみらい。彼は必死の形相で彼女の愛刀『レヴァンティン』を白刃取りで抑えていた。

（『はやてを守れ』と言ったな…。つまり敵では無い筈。そもそも…。）

…敵ならば…はやてに害なす者ならば、この家に設置した迎撃魔法が発動するはずなのだが…。

「…私の斬撃を初見で見切るとはな。貴様、できるな……。」

こっちは頭の整理を含めて必死だというのに、目の前の女性は心底楽しそうである。

「TPOを弁えていれば俺も似たようなことを思ったかもしれん。だが、敵と認めてない者に向ける闘志は持つとらん……！」

「それは私が相手にする価値もないということか……！」

「…おい、シグナム……。」

言葉の意味を勘違いし、激昂する目の前の彼女…『シグナム』。だが、そんなシグナムに『ヴィータ』と呼ばれた少女が気まずそうに声をかける。

「後にしろヴィータ……！騎士の誇りに賭けて私はこの男を……。」

「そいつ……主の家族だって……。」

・・・ピシッ

そんな音がシグナムから聴こえた。冷や汗をダラダラと流しながら、『ギギギ』ときこちなく首を後ろに回すシグナム。すると目に入ったのは、顔を真っ青にした守護騎士達と、笑顔を保ちつつ額に青筋を浮かべた主…はやてが居た……。

はやて side

くリビングにてく

「申し訳ありませんでした…。」

「いや、気にしないでいい。」

八神家の住人2人と守護騎士の4人は、色々詳しい説明をするためにリビングへと移動した。リビングに来た途端、シグナムがみらいに土下座をしていた。

「甘いで、みらいさん。こいついつ時はもっとビシッとせな…。」

「ならば、お前にももうちょい厳しく…。」

「前言撤回や。」

「…あれ以上厳しくされんのは嫌や…。え？充分甘やかされてるやと？細かいことは気にしたらあかんよ？」

「…何を考えている？」

「何でもあらへん。さ、説明してもらおうで？」

「承知しました。」

その言葉を機に、シグナムが『闇の書』の説明を始めた。曰く、この全部で666ページもある『闇の書』というのは、他者の魔力の源…『リンカーコア』を全ページ分集めると持ち主に絶大な力を授けるというものらしい。彼女ら『ヴォルケンリッター』はその持ち主を守る護衛役なのだそうだ。

そして、彼女達が『ベルカ』に縁がある者達であることと、『時空管理局』とはなるべく会いたくないということも聞いた…。

「成る程な。これって実はとんでもない本やったんか…。」

「…うつすらと魔力がにじみ出たのは気のせいでは無かったのか…。」

「では、早速蒐集のほうを…。」

説明を終わらせて早々にシグナムが蒐集の開始を提言する。しかし…。

「却下や。」

「「「「…は？」「」「」」

これには守護騎士の4人も啞然とした。眼前の主は、強大な力を手に入れる機会を目の前に『却下』と言ったのだ…。そのことが信じられない様子の4人だったが、みらいは違った。

「やっぱ、そうなるか…。」

「当たり前や。んな人様に迷惑かけてまで力なんか欲しくないわ。そういうわけで蒐集は禁止。これは主としての命令や。」

はやては『闇の書』を完成させる気が全く無いようである。そうすると困るのは守護騎士達のほうである。最初に赤髪の少女…ヴィータが口を開いた。

「じゃあ、あたしらはどうしたらいいんだ…？」

自分たちの役目のひとつ、蒐集が禁止されたので何をすればいいのかわからず、戸惑ってしまう4人。そこで、はやてが提案する。

「私たちの家族にならへんか？」

「「「「え？」「」「」」

まさかの提案に再び啞然とする守護騎士達。今日は思考がフリーズしてばかりである…プログラムの方にバグが発生しないか不安になってきた…。

「確かに蒐集は禁止したけど、私が主なことに変わりは無いんやろ？ だったら、みんなの面倒をみるのは主である私の責任。ただ、どうせなら家来とかじゃなくて家族として面倒みたいんや…。」

「い、いいのか…？」

「ちょ、ヴィータちゃん！！」

まだ若干躊躇う4人。そんな彼女らをみらいが後押しする。

「お言葉に甘えておけ。俺も、お前らと似たようなもんだった…。」

……ただの居候から、いつの間にか本当に大切な家族になっていた。

経験者にもそう言われて決心がついたらしく、守護騎士たちはついにはやての提案に首を縦に振った。それに対し、はやてはすごく嬉しそうである。

「よし、決まりや！！私は『八神はやて』。改めて、よろしく頼むで〜。」

主のそれに応じるために、守護騎士達も改めて名乗りだす。

「闇の書の守護騎士ヴォルケンリッター、剣の騎士、烈火の将、『シグナム』でございます。」

「同じく、湖の騎士、風の癒し手、『シャマル』です。お世話になります。」

「鉄槌の騎士、『ヴィータ』だ…。」

「盾の守護獣、『ザフィーラ』。お気遣い、感謝する。」

各自、物々しくも礼儀正しく（1名、微妙）自己紹介をすませたヴォルケンリッター。さらに将であるシグナムが全員を代表して締めくくる。

「我らヴォルケンリッター一同、ご厄介になります。」

「いえいえ、ようこそ八神家へ。…って、みらいさん？何、自分だけ難しい顔しながら黙っとるねん…。」

「…ん？ああ、すまん。ちょっと考え事を…。」

今まで沈黙を保っていたみらいが慌てて名乗る。

「俺は『八神みらい』。いわゆる次元漂流者で元居候だ……おい、はやて。何故にそんな目線を送ってくる？」

何故かはやてがジト目でみらいを見つめてきたのだ。困惑するみらいにはやては口を開く。

「分かってないなみらいさん……。みんなが折角かつこいい名乗りを上げたのに、自分だけそんなんでいいと思つとるんか？」

「…つまり、俺に本名の方を名乗れと？」

「そうや。」

その言葉にため息を吐くみらい。しかし、シグナムを筆頭に全員名乗ってもらった手前、自分だけそうしないわけもいかず、諦めた。

「それでは改めて…アルテミア王国、元王家直属近衛銃士隊一等武官、『ミランダル・ラインベルト』だ。この際だ、好きに呼んでくれ…。」

「因みに『銀河の守護霊』なんて通り名がついてたらしいで。」

「それは言わない約束だろがあああああ!!」

いきなり黒歴史を暴露され、荒ぶるみらい。『20代で物語の英雄扱い』という、むしろ光栄に感じる理由なのだが、どういう訳か本人はひどく嫌がっている。

「ええやん。『盾の守護獣』がありなら『銀河の守護霊』くらい普通や。な? ザフィーラ。」

「我ですか? ……自分としては立派な二つ名だと思いますが…。」

「…もう、いいよどうでも…。」

…そんなに重たい話ではなく、むしろ笑い話の部類に入るのでいつか話してやるかと決めたみらいであった。

シグナム side

はやてとみらい、二人のやり取りを見ながらも、シグナムはある事

を訊きたくてしやうがなかつた。ところが、先にその事に触れたのはみらいだつた。

「そついえば、訊きたいことがある。」

「なんでございませう…?」

「…これ。」

みらいは“ある物”を取り出す。それを見た瞬間、守護騎士の表情が驚愕に染まる。

「…やはり見間違ひではありませんでしたか…。」

「「!?!」」

「『闇の書』がもう一冊!? あんた、これどうしたんだ!？」

ウィータ達を驚かせたのは、みらいの所持品である『謎の家宝』である。こちらは未だに鎖で縛られたままだが、やはり『闇の書』と瓜二つである。先ほどのゴタゴタの最中、視界にチラリと入ったので気になっていたのだ。

「うーん…その反応からして、やっぱりコレの正体は謎なのか……
あと、もうひとつ驚くかもしれないことがあるんだが…」

そう言つて手を掲げるみらい。すると、彼の手に三角型の魔方陣が出現した。

「…もう、なんとはいいいのかわかりません……。」

ただでさえ信じられないこと続きだというのに…自分達ベルカと全く縁の無い筈の世界出身の彼が何故…。

…ベルカ式の魔方陣を展開している？

咄然を通り越して、最早狼狽の域に達してきた守護騎士たち。彼女らのその様子に、みらいも流石にこれ以上話しを続ける気が無くなった。なにより、はやてがいい加減眠くなってきたようで、ウトウトし始めている…。

「なんか話が長くなりそうだから続きは明日…いや、もう日にち変わってるのか……。朝にしよう。部屋はどうするか…。」

「丁度いい空き部屋があるから、布団出してシグナムとシャマルはそこにしよ。ザフィーラはみらいさんと一緒にええか…。」

「あの、あたしは…？」

一人余ったヴィータが尋ねる。それに対し、はやてはニッコリしながら答えた。

「私と一緒に♪」

「あ、そう…。」

ヴィータは微妙な表情を見せたものの、翌朝に満足気な表情を見せながら起床してくることは、本人さえ知らない。

――この日、八神家に新しい家族が増えた。その光景を、“みらいの本”が心なしか嬉しそうに眺めていた…。

第四話 守護騎士と守護霊（後書き）

ヴォルケンズの称号、特にシグナムのってアレであってましたっけ？

第五話 平和で騒々しい日常（前書き）

今後、ちよいと展開が原作と季節がずれるかもしれません…。

第五話 平和で騒々しい日常

はやてside

「12月28日・八神家」

「みらい殿、また手合わせ願えないだろうか？」

「ん？いや、今日はちょっと。」

朝食を終え、新聞を読んでいたみらいに模擬戦を申し込むバトルマニア（シグナム）。それに対し、同じく戦闘好きである筈のみらいは珍しく渋る。そこへ、ヴィータとはやてが口を出す。

「ちょっと待て、シグナム。今日、みらいはあたし達と遊ぶんだ。」

「そうやで。だいたい、昨日二人が暴れたせいで庭がとんでもないことになったばかりやないか…。」

先日、二人の戦闘狂により八神家の庭は悲惨なことになった…。無論、原因である二人は責任を持って庭を修復した後、残りの家族全

員に説教を受けた。

「ぐっ…。」

「そういうわけだ。それに、今日は先に二人と遊ぶ約束をしてたんだ。悪いがまた今度な？」

「…わかりました。ですが、年内にもう一度くら「今日の夕飯はシグナムだけシャルマルの料理や。」…すいません、自重します…。」

「ちょっと！？それどう言う意味よ!？」

自身の料理を罰ゲームのように扱われ、食器を洗いながら憤慨するシャルマル。しかし、そのことに関しては誰も味方してくれなかった…。

「言葉のままだ。あのザフィーラを見てもまだ言っか…。」

そう言っつてベランダの方を指差す。するとそこには、蒼い毛並みの狼が丸くなって蹲っていた。実は昨日の夜からずっとこの調子なのである……原因は…言わずもがな……。

「違うもん！！私、料理下手じゃないもん！！昨日はたまたま失敗しただけだもん！！」

「失敗しても“マズイだけ”にしろ！！」

昨日ザフィーラが倒れたとき、シャルは『ただ眠くなっただけよ』と言ってたが、みらいは目撃した。彼女がこっそりザフィーラに“治療”魔法を使用したのを……“治療”ではなく“治療”だったことが余計に不安だった……。

「まったく……。頼むから、もう一人で料理すんのはやめてくれよ？」

「……はい。」

……『闇の書』の起動から三日、守護騎士たちは八神家での生活に早くも慣れてきたようである。彼女らを迎え入れた二人も、新たな日常を満喫している。特にはやては、みんなの服を買いに行った時にとてもイキイキとしていた。

「そんで遊ぶ約束はしたけど、何をするんだ？いつもみたいに釣りは無理だろ？」

「そつやな、ヴィータがなあ……。」

先日、みらいの『どこでもフィッシング魔方陣』で釣りを教えてみたのだが…ヴィータは開始3分で飽きてしまったのだ。彼女の性格上、ああいうのは無理らしい。

「あれの何がおもしろいんだよ…」

「大人の遊びつてもんが分かってないな…。そんなだから見た目も…」

「ああ！？（怒）」

「すまん、言い過ぎた…」

そんなわけで頭を悩ます3人。あんまり派手に体を動かすようなことは、車椅子のはやてがキツイので却下。室内系は、元気が有り余ってるヴィータが嫌がる…

「…あ！隠れんぼでもするか？」

「え？家でするん？」

「狭いんじゃないか…？」

八神家は比較的に広い方に分類されるが、隠れんぼをするには流石に狭い。そんな二人の心配を余所に、みらいは不適な笑みを浮かべる。

「ふふふ…、抜かりは無いぞ？ちよつと待ってろ。」

そう言つて早速魔方阵を展開するみらい。ベルカ式と独特の技術が混ざったアルテミアの特有魔法である。シグナムとシャルマルがその光景を二日前の会話を思い出しながら眺めていた。

「…やはり、細かい部分は違えどベルカ式だな。」

「そうよねえ…。でも、アルテミアなんて世界…私たちの時代にあったかしら…？」

『闇の書』が起動した翌朝、みらいはシグナム達に自分の世界のことを語った。特に、互いにその存在すら知らないにも関わらず、何故か同じ魔法技術を有していることには驚いた。名前が『ベルカ式』で彼女達の出身が『ベルカ王国』なら、やはりアルテミアになんらかの形で技術が流れたということで一応片が付いた。

「…だが、実用性や出鱈目加減は向こうの方が上かもしれん……。」

「…体をそのまま縮めるってどんな魔法よ……？」

二人の視線の先には、みらいの発動した魔法陣により人形サイズまで縮んだはやてとヴィータ、そしてみらいが居た。

「うおおおお！？なんだこりゃあああ！？」

「わああ…、家具がめっちゃでかく見えるわ……。」

「ぬはははは。本当はコレ、潜入や隠密行動専用の魔法なんだけだな…。まあ、要は使いようだ。これで思う存分遊べるぞ……ん？お前も参加するのか…？」

よく見ると、3人に加えて“みらいの本”…最近はとりあえず『黒の書』と呼んでいる例の本と一緒に縮んでいた。こっちは“自力で”縮んだようである。

「なんか最近積極的やな…。もしかして、前から構って欲しかったんか？」

「…あたしはあんまりコイツ好きじゃないんだけど……。」

「どう考えたって、あの時はヴィータが悪いだろ？」

あの時とは、アルテミアとベルカの話が終わらせたとのことである。ひとりでに移動することからただの本では無いことは確かなのだ。しかし、一応できる範囲で調べたのだが、結局『闇の書』とそっくりな理由も中身がなんなのかも解らなかった。鎖が取れないので中身を調べれないのだ。それに痺れを切らしたのがヴィータだったのだが…。

『ああもうメンドクせえ！！どいてろ！！』

『馬鹿！！よせ！！』

『「ラケーテン・ハン」ズビシッ！！「ブベツ」？』

…鎖を叩き壊すべく『グラフ・アイゼン』を振り上げたヴィータの顔面に、『黒の書』がメリ込んだ…。

みらい曰く、自分も同じようなことを何度かしたらしいのだが、ヴィータと同じように反撃されるか瞬間移動で逃げられたのだそうだ

…。そのため、鎖を外すこと自体はとうの昔に諦めていた。

「ていうか、知ってたら止めろよ!」

「『よせ!』って言ったろうが…。」

「まあまあ、とにかく始めよ? 『黒の書』さんも混ぜてええよ。」

はやての言葉に喜ぶかのごとく『黒の書』は宙を舞った。その様子に若干ヴィータがおもしろくなさそうな表情を見せる。しかし…。

「んな顔して…。本当は自分が悪かったって分かってるくせに…。」

それを直接言うと思うので黙々とくみらいであつた…。そして同時に、今後のことを真剣に考え始める。何を考えてるかというと、自分たちの友人達のことである。

- - - 先日、管理局員であることが発覚した猫姉妹。

- - - 前回の事件を経て交流関係が続いている提督と執務官ら。

- - - 管理局の民間協力者である戦友達。

そう…彼の周囲には、守護騎士たちが接触を避けたいと言った管理局員だらけなのだ……。そのことを言った時の4人の様子は、容易には語れないほどに落ち込んでいた。それに対し、みらいは『大丈夫だ』と言ったのだが…当然、簡単な話では無い。

（なのはやフィーアは話せば解るとして…問題はアースラか……。）

特にクロノだ…。あの真面目な性格上、説得には苦勞しそうである。リンディは…考えるのはよそう…絶望しそうだ……。

…ハラウン親子と『闇の書』の因縁を知らないみらいは、それ以上のことを考えなかった…。

「みらいさん？どうしたん？」

「おっと、悪い悪い考えごとしてた…。」

せめて、今ぐらいそのことは忘れよう…。そう思いながら、みらいははやて達と遊び始めるのだった。

…この時、彼はまるで予想していなかった…。“あの二人”が自分達に隠し事をしていることを…そして、それが辛くなってきた

いたことを……。

第五話 平和で騒々しい日常（後書き）

次回は大晦日の話になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8489y/>

漂流者は守護者で保護者～ヤテンノオヤコ～

2011年12月1日14時45分発行